平成17年度購入資料の紹介

――朝鮮の陶磁器――

髙　橋　隆　博

博物館にとって、いつも念頭におかなければならない課題のひとつに、館蔵品の充実がある。とはいっても、大学博物館は、一般の方がたからの寄贈、あるいは寄託といった機会がきわめて少ない。そして、購入についても、もとより潤沢な資金が用意されているわけではない。そのため、どの分野の資料を、どのように系統的に収集すべきか、いつもながら心を砕いている。

平成13年度からは、不充分ながらも漢時代から明時代までの中国の陶磁器資料15点を収集してきた。これらは、すでに平成15年度の『博物館開館10周年記念　名品展』をはじめとし、平常陳列にても公開してきた。今年度は、朝鮮の陶磁器を６点購入した。周知のように、当館は新羅土器や伽耶土器、あるいは絵高麗や粉青沙器など、いくつかの朝鮮の陶磁器を収蔵しており、これのさらなる充実をはかるための購入であった。

韓国では、図書館と博物館を設置することが、大学の設置基準とされているために、ソウル大学をはじめとし、高麗・延世・梨花女子大学校など、いずれの大学も立派な博物館を有している。慶尚北道大邱市の名門校として知られる慶北大学校の野外陳列場には、石仏や石造品などが、芝生をしきつめた美しい景観を誇る小高い丘のそこかしこに惜しげもなく並べられている。この点、日本の大学博物館は、大いに韓国の大学博物館に見習うべきであろう。

灰釉梅瓶

（高麗前期　高32センチ　胴徑18.5センチ）

口縁部が細くて立ち上がりが短く、肩部が豊かに張り、脚部がすぼまった姿形の瓶を梅瓶とよんでいる。この名称の由来は中国にあって、中国では口径が小さいものを「梅の痩骨」と呼ぶところから名づけられたといわれている。中国では、宋代の青白磁器に多くみられ、宋代以後も踏襲され、朝鮮半島では、高麗時代の青磁や朝鮮時代の三島手にしばしば見られる器形である。

朝鮮半島では、三国時代（高句麗・新羅・百済）の四世紀ごろから、傾斜地に細長い穴窯を築き、硬く焼き締まった陶器を焼成するようになる。この技術は日本に伝わって、日本の須恵器の生みの親となった。傾斜のある窯は、いわゆる「火の引き」がよいために比較的容易に高い火度を得ることができ、しかも次つぎと薪を投入することによって「還元」の状態で器を焼き締めることになる。本作例は、焼き締めによるものだが、器形はすでに統一新羅時代のそれではないが、この梅瓶を覆う自然灰釉（青磁釉薬の祖型。窯の中で灰が降りかかり、素地の中の硅石分を溶解し、器の表面に一種のガラスをつくり出す）は、やがて全盛を迎える高麗青磁の出現を暗示している。したがって、この梅瓶は高麗時代ごく初期の作例といえよう。

粉青印花文茶碗

（李朝前期　高7.5センチ　徑18.3センチ）

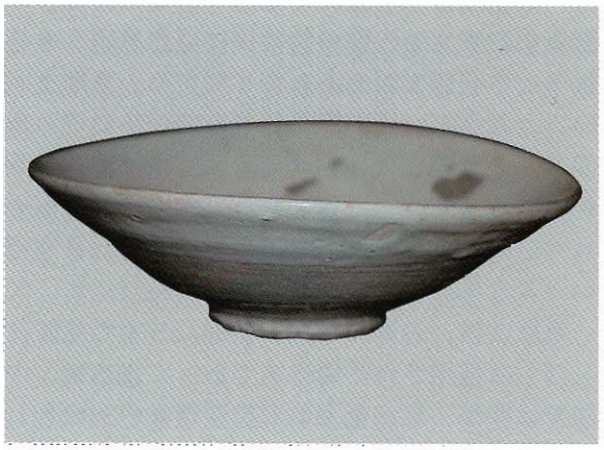
茶碗の見込みに二つの界線をめぐらし、中央の界線内にはいくつかの菊花文をあらわし、その周囲に剣菱文をめぐらし、さらにその外側には鎬文を配している。技法的には、鼠色の胎土をもちいてロクロで成形し、半乾きの素地に菊花文や剣菱文の型を押しつけて印文をほどこしたのちに白土で化粧掛けをほどこし、さらにこれを拭き取ると、まるで印文の凹部に白土を象嵌したような表現となる。これに透明の釉薬をかけて焼成するのである。こうした焼き物を日本では俗に三島手といい、現在朝鮮では粉青沙器（粉装灰青沙器の略）とよび、おもに15～16世紀にかけて、現在の韓国南部でつくられた。朝鮮時代には、高麗青磁の技術が衰えをみせるが、その象嵌技法の名残りといえる。

三島手の名称は何に由来するのか、はっきりしない。地文様となっている鎬の波形文や印花の象嵌文様が、三島暦の文字に似ているところからついた名称というのが通説とされている。三島暦とは、伊豆国の三島明神社が応仁・文明のころ、伊豆と相模の両国に限って頒布した仮名の細字書きの暦のことである。ちなみに『茶道正伝集』は、「茶碗に昔伊豆三島より出せる三島暦に似たるを文様あるをもって之を三島といひ、又暦手ともいふ」と記している。

刷毛目平茶碗

（李朝前期　高5.7センチ　徑18.5センチ）

浅く平たい形をした茶碗。灰鼠色を呈する胎土でつくった茶碗に白い泥釉を厚くぼってりと掛けているが、あまりに白泥が厚かったためか、乾燥している間に白泥が飛んでしまっている個所がみられる。こうした形の茶碗は、日本の茶席では、夏茶碗として夏期に好んでつかわれる。刷毛目とは、稲わらの芯にあたるミゴでつくっ



た硬い刷毛で白い化粧土を器に塗る技法のことをいう。刷毛で一気に化粧土を塗るために、濃淡、あるいはかすれた部分が生じるのだが、日本の茶人たちは、それを一つの「景色」「風趣」として鑑賞してきた。

茶碗の見込みには、重ね焼きした際の目跡が六つ、高台にも六つ残っており、特に見込みの目跡は景色となっている。刷毛目は、粉引（化粧掛けの白泥釉がまるで粉を引いたようにも見えるところから付いた名称。粉吹ともいう）や三島手と同じ系統の技法に属するが、三島手がより簡略化されたものである。こうした三島手や刷毛目、粉引系の焼き物は、おもに韓国の慶尚南道で焼成された。

白磁青花鳳凰文壺

（李朝後期　高23.5センチ　胴徑19センチ）

本作例にみられるような、肩を大きく張り、胴から裾にかけてすぼまるプロポーションの壺は、李朝磁器に特徴的な器形である。胴部には鳳凰文と雲文を、首の付け根には如意頭文を連続させる装飾文帯をあらわしている。鳳凰文といい、雲文といい、簡略化されているので、李朝後期の焼成とみなされよう。文様はすべて酸化コバルトを含んだ青色を発色する顔料で描かれている。青花とは、中国名であって、日本でいうところの染付にあたる。

鳳凰文は、おもに中国、朝鮮、日本の意匠にしばしば採用される瑞祥文であって、古来、中国では麒麟、亀、竜とともに四瑞祥の一つとして尊ばれてきた想像上の瑞鳥である。その形姿は、前は麒麟、後ろは鹿、尾は魚、背は亀、顎は鶏に似ているといわれ、梧桐に棲み、竹の実を食し、醴泉を飲し、聖徳の天子（大変すぐれた天子の意）が現れる時に限って、その予兆として、この世に姿を見せる瑞鳥とされ、九万里の青天を飛翔し、その姿は万人の目にはとまらないとされている。

白磁青花菊枝文壺

（李朝後期　高19.5センチ　胴徑20センチ）

白い釉肌に染付けで大ぶりな菊枝文と蝶とを胴部全体にあらわした丸い壺。文様を線描した中に、濃（だみ）といって、太い筆でごく薄い

呉須の溶液で広い面をむらなく塗りつぶしているので、陰影がくっきりと表現されることになり、そのため菊枝文に立体感と写実性を与える効果を発揮している。とはいっても、文様の粗雑感はいなめず、その焼成時期は李朝後期まで降る作例といえる。

陶磁器に限らず、朝鮮美術が採用するもっとも多い意匠に四君子がある。四君子は、菊・梅・竹・蘭の四つで、これらはそれぞれ君子たる気品を備えていることをあらわしたもので、君子の気品とは、「君子の三楽」すなわち「父母兄弟が無事であること」「天地に恥じることのないこと」「天下の英才を育むこと」にある。こうした君子の実直な気風が、李朝の儒教に適応し、その象徴である四君子が尊ばれたのであろう。

なお、菊花文は、朝鮮半島では高麗時代中期ごろから流行し、工芸意匠の主流となる。しかしなんといっても、菊花の気質はその辛抱づよさにある。菊以外の花が散る秋に花を咲かせ、しかも厳しい霜が降りても花を散らさないところから、君子の聖徳・義理・忍耐の象徴とされ、四君子の一つになったと考えられる。

白磁餅型

（高5.5センチ　徑18.7センチ）

餅菓子などに押しつけ文様を型押しする道具で、木製の型もみられるが、焼き物が圧倒的に多い。餅菓子文となる見込みの陽刻文は、中央に大きな菊花を置き、その四方に半菊花の覗き花文と枝葉文のそれぞれ二つをあらわしている。餅型だけでなく、李朝の陶磁器には、たとえば酒注や盃などの飲食具、水滴や筆筒などの文房具、さらには祭器鉢から油壺、はてはおろし板にいたるまで、じつに多種多彩にわたり、しかも愛すべき小品がじつに多い。のみならず、蛙とか鳥、桃を、あるいは獅子を、さらには牛にまたがって笛を吹く童子を象るものから、おどけた表情の虎を染め付けで描くなど、多岐におよんでいる。こうした作品には、李朝人の豊かな美意識と無垢な心情が、自然に表出されているとみなければならない。

ところで、李朝の白磁の色調について、これまで日本人は、朝鮮民族のおだやかな気風が白色嗜好を招いてきたとか、この国の悲劇の歴史と重ね合わせて、悲哀の色とみなしてきたが、こうした考え方はまったくの誤りで、たとえば『五州衍文長箋散稿』に「わが国の磁器は潔白なるを以て其の長点とす」とする故事が紹介されており、いかに白色が高貴な色をあらわしているか、貴ばれてきたかをうかがうことができよう。